

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2026年7月24日

あの日、僕らは戦場で

時をさかのぼること 80 年あまり。太平洋戦争末期、日本が絶対国防圏としていたマリアナ諸島サイパン島を陥落させ、徹底抗戦した硫黄島の日本軍守備隊を玉砕（＝全滅）させたアメリカ軍は、西太平洋に展開するすべての戦力を沖縄へ集中、1945 年 4 月 1 日、約 18 万人の攻撃部隊が沖縄本島に上陸しました。約 3 ヶ月におよぶ沖縄戦の始まりです。沖縄を日本本土攻撃の拠点とするため、艦船約 1500 隻、人員約 54 万人という太平洋戦争最大規模の兵力で迫るアメリカ軍に対し、迎え撃つ日本軍は約 11 万 6 千人でした。

本島中部西海岸の読谷村、北谷村付近から上陸したアメリカ軍は、その主力を日本軍がたてこもる南部戦線へと進攻させます。5 月下旬、司令部のあった首里が陥落すると、日本軍は本島南部の糸満方面に撤退しながら戦闘を続けます。撤退の混乱の中で、戦場は、軍人と民間人が混在する状態となり、多くの一般住民が銃弾に倒れていきました。6 月 23 日には日本軍司令官の牛島満中將が自決、日本軍による組織的戦闘が終結します。しかし、牛島司令官は自分の死後も降伏を許さず、各自が戦闘を継続するよう命令を残していました。それは、沖縄を捨て石とし、戦闘を長期化させることで、少しでも本土決戦を遅らせ、また、戦争終結にあたりアメリカから少しでも有利な条件を引き出したいという日本政府の意思を反映したものでした。このことが、沖縄住民に多大な犠牲を強いることとなります。約 20 万人とされる沖縄戦での日本側の犠牲者のうち、半数以上が民間人だったといわれています。当時の沖縄県民のうち、実に 4 人に 1 人が沖縄戦で命を落としたのです。

南部の激戦について語られることの多い沖縄戦ですが、アメリカ軍の一部の部隊は「やんばる」と呼ばれる本島北部を目指しました。ジャングルにおおわれた山岳地帯に村々が点在する広大な北部を制圧し、背後からの日本軍の攻撃を阻止することが目的でした。

その沖縄北部でアメリカ軍と戦った少年たちがいました。日本軍唯一の少年ゲリラ部隊「護郷隊」^{こきょうたい}です。10 代半ばの、幼くして兵士とされた少年たちは、やんばるのジャングルで敵と殺し合い、友の死を目の当たりにし、自らも命を散らせていきました。太平洋戦争開戦 70 年にあたり、2011 年 8 月 11 日に放送された NHK スペシャル『あの日、僕らは戦場で-少年兵の告白-』の DVD が本校の図書館に所蔵されています。今回の校長室だよりは、まずは、この DVD にもとづいて書いていこうと思います。

「護郷隊」は読んで字のごとく、郷土をアメリカ軍から守るという名のもとに、1944 年、14 歳から 17 歳の地元の旧制中学生等が中心となって編成されました。本来、徴兵^{ちようへい}が可能となる年齢は 18 歳以上でしたが、兵力不足を補うため、現在の中学生や高校生にあたる少年たちが集められたのです。当時の法律では、18 歳未満の少年を兵士動員するためには、本人の「志願」が

条件でした。しかし、その実態は、志願とはほど遠い「強制」であったことが元護郷隊員の証言から明らかにされています。ある少年は「志願を拒んだ者には、死刑の通知を自宅に送る。お前たちの命など、はがき一枚でどうにでもなるのだ」と告げられたといいます。

陸軍中野学校出身の将校に率いられた護郷隊の役割は、当時、遊撃戦と呼ばれたゲリラ戦にあたることでした。圧倒的な戦力を誇るアメリカ軍に対して正面から戦っても勝機はありません。そこで将校は少年たちに、爆弾の製造方法や、山に潜み、敵の背後に忍び寄って奇襲攻撃を行うゲリラ戦の高度な技術をたたき込みました。ゲリラ部隊である「護郷隊」については正式の記録や情報が少なく、その詳しい実態はわかりません。しかしさまざまな証言は、過酷で非人道的な訓練によって少年たちが人間らしい心を奪われ、死を恐れず、殺人をいとわない「兵士」に変えられていったことを伝えています。

沖縄県北部にある東村出身の玉那覇有儀たまな は ゆうぎさんは、16歳で護郷隊に加わりました。沖縄の山と海の恵みを受けて育った玉那覇さんは、勤労働員で飛行場建設作業にあたっていました。ある日、玉那覇さんは軍から、名護の国民学校に出頭するよう至急の命令を受けます。そして、何も知らず集められた玉那覇さんたち約700名の少年たちは、有無を言わず、護郷隊への入隊を命じられたのでした。

その直後から、玉那覇さんたちの苛酷な訓練の日々が始まりました。少しでも気を抜いたり、目標を達成できなかったりすれば、容赦のない鉄拳制裁てつけんせいさいが待っています。げんこつで顔を殴られ、革のベルトでむち打たれ、玉那覇さんたちの顔は腫れ上がり、体は傷だらけになっていきます。そんな少年たちに上官は「敵を10人殺したら死んでもいい」と告げます。「死は鴻毛こうもう(鳥の羽毛)よりも軽し」と教え込まれた玉那覇さんは、やがて、いつ死んでもいい、死ぬのは怖くないという気持ちに変わっていったといいます。「何も考えられない(状態に追い込む)やり方だった」と玉那覇さんは当時を振り返っています。

子どもながら敵と殺し合ったという記憶に長年苦しんできた玉那覇さんは、「ありがとうと国からひと言もらいたい」「若い人たちに分かってほしい。僕らのやったことを後の世の人に知ってほしい」と語っています。

東江平之あがり え へいゆきさんは、14歳で護郷隊に入隊しました。「家族にも話にくい、話したことがないこと」と前置きして、東江さんは、ある経験について語りました。

訓練が終わったある日の夕方、東江さんたち少年兵は上官のもとに集合し訓示を受けていました。「お前たち、死ぬ覚悟はできているのか？」と問われ、少年たちは口々に「はい！」と答えます。東江さんも「はい！」と大きな声で答えました。すると上官は「試してやる。首を出せ」と言うと、東江さんをひざまづかせ、首を前に差し出させました。そして腰の日本刀を抜き放ち、振りかぶると、「お国のために死ぬるか！」と一喝します。そのまま上官が刀を振り下ろしたなら、東江さんの首は切断されてしまいます。恐怖に震えながらも東江さんは「はい！」と答えます。すると上官は再び「お国のために死ぬるか！」と尋ねます。東江さんは「はい！」と答えるしかありません。同じ問答を何度か繰り返した後、ようやく上官は「それでいい」とつぶやいて、刀を収めたといいます。

「もう何も特別なことは考え(られ)ない。親のこと、将来のこと、痛いだろうかなど考えない。無心に首を差し出していた」と東江さんは言います。東江さんは、当時の自分たちを、屠殺場とさつじょうに引

かれていく牛や豚のようだったと回想しています。

1945 年 5 月、沖縄北部はアメリカ軍に制圧されつつありました。護郷隊は、中部に近い恩納^{おんな}岳^{だけ}に追い詰められていました。恩納岳には付近から逃れてきた日本兵も加わり、約 300 名程度が身を潜^{ひそ}めていたといひます。5 月下旬、アメリカ軍は恩納岳を包囲し総攻撃を開始します。古くから沖縄の名山として親しまれ、数多くの琉歌(沖縄の短歌)の題材ともなった恩納岳は、激しい砲撃と、空爆にさらされました。

17 歳だった玉那覇盛一^{たまな は せいいち}さんは、恩納岳にたてこもる護郷隊の機関銃部隊に属していました。同じ村出身の親友、金城豊秀^{かねしろ とよひで}さん(17 歳)、比嘉徳政^{ひ が とくせい}さん(18 歳)も同じ機関銃部隊でした。ある日、玉那覇さんたちが隠れていた陣地めがけ、アメリカ軍が山を登って攻撃をしてきました。玉那覇さんたちは壕の中から機関銃やライフル銃で応戦します。激しい銃撃戦の中、玉那覇さんの隣で銃を撃っていた比嘉さんが、突然ぱたりと倒れました。敵の銃弾が比嘉さんをとらえたのです。「徳政がやられたぞ」と誰かが叫ぶ声に、玉那覇さんは不思議と何も感じなかったといひます。玉那覇さんの頭の中には、ただひたすら敵を殺すことだけがありました。

数に勝るアメリカ軍を防ぎきれないと判断した上官は、援護を求めるため、金城さんに司令部への伝令を命じました。ところが壕を飛び出した金城さんに、敵の砲弾が命中してしまいます。「壕から出て 3 メートルほど行った時に、(金城さんは)迫撃砲の直撃を受けて、体の左側が破裂して引き裂かれた。わき腹から下の方。呼吸するときにプーカー、プーカーと(なっていた)。もう意識はないですよ。痛いこともわからない」とそのときの様子を玉那覇さんは語っています。

恩納岳では、分かっているだけで 36 名の少年が命を落としました。しかし、何よりも玉那覇さんを苦しめたのは、親友の死を目の前にしても何も感じない自分の心だったといひます。玉那覇さんは当時を「やさしさも、怖さも、何もない。妄動(の状態にあった)」と振り返っています。妄動とは、心が動かなくなり、自ら判断できず、命令のまま行動してしまう状態をいひます。「17、18 の若者が殺し合う。もうあんな場面は目にしたくない」つぶやくように言ったあと、玉那覇さんは黙り込んでしまいました。

アメリカ軍の猛攻に耐えきれなくなった護郷隊は、恩納岳からの撤退^{てつたい}を開始します。その混乱の中でも悲劇が起きます。仲泊栄吉^{なかどまり えいきち}さん(15 歳)は、負傷者を山の頂上付近の野戦病院に運ぶ役割でした。負傷者の中に、仲泊さんと同じ村出身の高江洲義英^{たかえ す ぎえい}さん(17 歳)がいました。高江洲さんは、脚を負傷して自力では歩くことができない状態でした。

「高江洲義英、あの人をやる(殺す)のを見た。軍医が……。映像の中で、仲泊さんは声をふり絞るようにして話し出します。そして「土手に座らせ、毛布をかぶせて…拳銃でやった」「今考えたら、夢か何かみたい(だ)。もう二度と…」とだけ言うと、その後、言葉を続けることはできませんでした。

自力で撤退できない少年を、軍医が拳銃で射殺する場面を仲泊さんは目撃していました。当時の日本は「生きて虜囚^{りよしゆう}の辱^{はづかし}めを受けず」という教育を、軍人はもちろん一般の民間人にも徹底させていました。要は、生きて敵の捕虜^{ほりよ}になるくらいなら自ら命を絶ちなさい、ということです。サイパン島や沖縄で起こった、住民の集団自決の背景にも、この教えが存在しました。軍医が、脚を怪我して動けない少年を殺害したのは、それが当時の日本軍の規則であり価値観だったからです。拳銃の引き金を引いた軍医は、冷酷無比な殺人者だったとは限りません。戦場に

出る前は、家族を愛し、子供たちをかわいがる優しいお父さんだったかもしれません。その場面を想像すると、漆黒の間に似た恐怖を感じます。

義英さん殺害の現場を目にした仲泊さんの心の傷は、戦後も消えることはありませんでした。その事実は一人胸の中にしまいこんできたといいます。もちろん義英さんの遺族には何も言えないままです。DVDには、戦後 70 年近くが過ぎ、義英さんの十歳下の弟に、仲泊さんが初めて真実を告げる場面が収められていました。兄は怪我が原因で亡くなったと知らされていた義英さんの弟に、仲泊さんは「そうではなかったのです」と告げます。しかし、なかなかその先を伝えることができません。やっとのことで「軍医が拳銃で」とだけ伝えた仲泊さんを前に、義英さんの弟は「そうですか、拳銃で…」と言ったきり言葉を失ってしまいます。義英さんの弟は「いつも僕をかわいがってくれる、優しい兄でした」「兄の遺骨が届けられたとき、母は半狂乱になり、“あんたはなぜこんな姿になったのか”と頭蓋骨を抱いて泣き崩れていました」とも話していました。

沖縄の悲劇は、護郷隊ばかりではありません。民間人をまきこんだ地上戦が行われ、「この世の地獄」とも評された沖縄戦では、茨城県の約 5 分の 1 の面積しかない小さな島の中で、無数の惨劇が繰り広げられました。

その一つに「ひめゆり学徒隊」があります。「ひめゆり学徒隊」とは、沖縄戦において看護要員として動員された沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の生徒 222 名と引率教員 18 名のことです。彼女たちは沖縄陸軍病院で傷病兵の看護にあたっていました。日本軍司令部のあった首里が陥落すると、負傷兵と共に南部へと逃げ延びます。しかし、6 月 18 日、アメリカ軍がすぐそこまで迫る中、突然、彼女たちに日本軍から解散命令が下されます。それは、「ここから先は各自、自力で生き延びよ」ということを意味していました。逃げ場のない戦場に取り残された少女たちは、アメリカ軍の激しい攻撃の中、次々と命を落としていきました。捕虜となることを恐れ、手榴弾で自決した生徒も少なくありませんでした。結果として、動員された 240 名のうち 136 名が命を落としたのです。

かつて、本校では高校 2 年生を対象に沖縄研修旅行を実施していました。その中で、自分には忘れられない場面があります。それは 20 年程前、研修旅行の引率教員の一人として沖縄を訪れた際の、ひめゆり学徒隊の史実を伝える「ひめゆり平和祈念資料館」での出来事です。生徒たちは、見学後の集合時間だけ伝えられ、班ごとに自由に館内を見学することになっていました。自分も何年ぶりかで訪れる資料館の展示をゆっくりと見て回っていました。

ひめゆり平和祈念資料館の第四展示室は「鎮魂の間」と名付けられています。そこには、静かな音楽が流れ、ひめゆり学徒隊の女子生徒や教師の方々の遺影が、壁面いっぱいに展示されています。静謐な空気が漂う中、本校生を含む多くの来館者が、展示室の遺影や資料を見てみると、ふいに騒がしい声がしました。見ると、修学旅行生らしい高校生男女 4 人組が展示室に入ってくるところでした。彼らは、周囲の来館者を気にする風もなく談笑しています。特に大声ではなかったのですが、その声は周りが静かなぶんだけ耳ざわりで、異質な感じでした。

「困った子たちだなあ。彼らを引率してきた教師は、近くにいないのだろうか？」と思って見渡しましたが、それらしい人物は見あたりません。仕方なく、また展示に目を向けたのですが、しばらくすると自分の耳に信じられない音声が聞こえてきました。「笑っている？」振り向いた視線の先には、先ほどの 4 人組の高校生が、壁面の遺影の一つを指差し、笑っている光景がありました。どうやら、その遺影が、友人の誰かに似ているということのようです。ここで我慢の限界がまし

た。自分は四人に近づくと「君たち、ちょっと不謹慎じゃない？」と声をかけました。自分では意識していませんでしたが、かなり鋭い口調だったと思います。驚いてこちらを見た四人組は、最初は何を言われているのかわからない、といった表情でした。「この写真は、沖縄戦で亡くなった人の写真だよ。不謹慎だと思わない？」と言うと、はじめて何を言われているのか気づいた四人は、顔を見合わせ、ちよつとわずき合うと不満そうな顔つきで展示室を出て行きました。きっと自分は、そんな彼らを怖い目つきで見送っていたのだと思います。

今、この場面を思い出すと、彼らに申し訳なかったな、という思いと、今だったらもっと違う声のかけ方ができたな、という後悔とが交錯します。たしかに彼らは不謹慎でした。しかし、それは彼ら自身の落ち度ではなく、ひめゆり学徒隊に何が起こったのか、ひめゆり平和祈念資料館とはどんな場所なのかをきちんと教えることもなく、資料館を訪れさせた大人たちの責任だったかもしれません。あるいは彼らは、ひめゆり学徒隊に何が起こったかを知識としては教えられていたのかもしれません。しかし、それを自分の身にひきよせて想像する機会は与えられてこなかったのでしょう。自分が注意した四人組は、戦争や平和についての議論に対して「押しつけがましくて嫌なもの」という印象を持ってしまったかもしれません。もしも今、あの場面にもどれるなら、自分は、「ねえ、君たち、この部屋に飾られている写真の人たちってどんな人たちか知ってる？」と声をかけると思います。そして、彼らと同じ 10 代の少女たちに何が起こったのかを伝え、彼らと話し合い、一緒になって考える機会をつくろうとしたと思います。

八月、日本は 81 年前の戦争を回顧し、その犠牲者の死を悼み、平和への祈りを捧げる時を迎えます。中学生、高校生の君たちにとって、まず大切なのは知ることです。81 年前、日本はどんな道を歩もうとし、その結果、どれほどの苦痛と悲しみが人々にもたらされたのか、正しく知ろうとすることです。

今、世界は第二次世界大戦前夜の状況に似ている、と分析する人たちがいます。長く戦後の平和を支えてきた国際秩序が揺らぎ、一部の大国による「力による現状変更」を止める手立てで世界は探しあぐねています。権威主義的国家同士が軍事・経済面で結びつきを強め、他国の主権に介入する動きを加速させる一方、民主主義国家においてもグローバリゼーションの反動ともいべき、保護主義、自国第一主義的な傾向が広がっています。

私たちは、歴史に学び、81 年前の戦争の尊い犠牲を教訓に、戦争のない平和な世界の実現を目指さなければなりません。その第一歩が「知ること」です。正しい知識こそが、恣意的な世論の誘導や歴史修正主義を退け、戦争を回避するための平和の盾となるのです。

日本軍が組織的戦闘を終えた 6 月 23 日を沖縄は「沖縄慰霊の日」とさだめています。多くの戦没者が眠る糸満市摩文仁の丘では、毎年「沖縄全戦没者追悼式」が行われ、島中が鎮魂の祈りに包まれます。

今年の追悼式で、玉城デニー沖縄県知事は、あらゆる戦争に反対し、平和を実現することは「空虚な理想論ではなく、取り組むべき責務」であると訴えました。また、護郷隊の少年たち、ひめゆり学徒隊の少女たちと同年代の、中学 2 年生の亀谷琉奈さんが「生きたいと願った証」と題した詩を朗読しました。朗読する亀谷さんの強く澄んだまなざしが印象的でした。亀谷さんが、曾祖母から聞かされた戦争体験をもとに作ったという詩を、本文の最後に紹介します。

今回の校長室だよりが、生徒諸君にとって、戦争について、平和について考える小さなきっか

けとなれば幸いです。

* * * * *

「生きたいと願った証」^{あかし} 亀谷 琉奈さん

あの日の沖縄には/青い海も/優しい風もなかった/空は黒く/地面は揺れ/人々の叫び声が絶えなかった/爆撃の音が/心まで壊していく

まだ若かった曾祖母は/小さな体で必死に走った/血だらけの道を/倒れた人たちの横を/もう動かない人を見ながら/涙を流す暇もなく/ただ生きるために/そして/愛する夫の命を案じながら/「お願い 生きていて」/その想いだけを胸に/足がもつれても/呼吸が苦しくても/転びそうになっても/前へ前へと走った/しかし/その願いは/もう二度と届かなかった

その時のことを話す曾祖母の声は/今でもとても優しい/でも 私は知っている/その優しい声の奥に/今も消えない悲しみがあることを/細い足/しわしわの手/小さな背中/長い年月を生きてきたその姿を見るたび/私は戦争の重さを感じる/そして/曾祖母の右足には/今も傷が残っている/それは/戦時中 自分で引っ掻いた傷/灰色の空の下/爆撃の音が鳴り響く/恐怖と不安でいっぱいになり/右手に握った石で/自分の右足を何度も何度も引っ掻く/気づけば手も足も血だらけだった/私が真実を知った時/胸を締めつけられた/どれほど怖かっただろう/どれほど苦しかっただろう/生きたい/死にたくない/その想いだけで/曾祖母は必死に生き延びた

戦争は人を傷つける/体だけじゃない/心まで壊してしまう/家族と笑う時間/友達と過ごす時間/「また明日ね」と言える幸せ/そんな当たり前を/全て奪ってしまう/でもそれは/当たり前なんかじゃない/血と涙の中に生き抜いた人たちが/命を繋いでくれたから/今の私たちがいる/もし曾祖母が/あの日 走っていなかったら/もし/あの日 命を落としていたら/私はここにいなかった

曾祖母の右足の傷は/ただの傷じゃない/「生きたい」と強く願った証/「戦争は二度としてはいけない」/という叫び/私はその想いを/これから先も伝えていく/もう誰にも/血だらけの道を/走ってほしくないから/もう誰にも/愛する人の命が奪われることに/怯えてほしくないから/もう二度と/沖縄の空を戦争で/染めてはいけないから

平和は当たり前じゃない/たくさんの人の涙と苦しみと/「生きたい」という願いの上にある/だから私は忘れない/沖縄戦で苦しんだ人たちを/愛する人を守ろうとした想いを/泣きながら生き抜いた人たちを/そして/曾祖母の右足の傷を/「生きたい」と願った証の傷を/平和な未来へと繋いでいくために

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。